

第41回

第6章 現代の諸課題と倫理

文化や宗教と倫理

今回学ぶこと

私たちの社会で、文化は大きな役割を果たしています。近代化の過程で西欧は、自分たちの自己像を作り出す際に、東洋を停滞して遅れたものであると描き出しました。異文化の理解のために、文化相対主義や多文化主義の実践が必要とされますが、その重要性和、実践の過程ではさまざまな問題が生じていることも学びます。



講師

千田有紀

■ 文化とは何か ■

文化のもともとの語源は、精神を耕すということから来ています。精神を耕した結果生まれる芸術や学問などを指す用法です。そもそも文化という言葉は、明治の近代化の過程で、翻訳語として受け入れられた言葉で、大正期には、文化包丁、文化住宅、文化生活といった言葉が流行しました。

その一方で、もう少し広く、規範、道徳、宗教、芸術、家族のかたちなど、ありとあらゆる社会的に作られているものを文化と呼ぶ用法もあり、文化人類学などの学問の対象となるのがこうした文化です。

近年は、グローバル化の進展に伴って、私たちは日本に居ながら多くの異文化に触れる機会が多くなっています。

■ オリエンタリズムとは何か ■

オリエンタリズムは、主にアメリカの思想家エドワード・サイードによって作られた概念です。もともとは東洋に対する異国趣味を指していました。サイードは、近代の西欧社会は、東洋を、後進的で受動的、停滞的、非合理的で官能的なものとして描き、文化的支配をしてきたこと、そしてその合わせ鏡として、先進的で文明化した存在としての西洋の自己像を作り上げてきたことを明らかにしました。

日本は近代化の過程で、欧米からの「遅れている」というまなざしを受け入れながらも、近隣のアジア諸国に対しては支配的にふるまうという、二重のオリエンタリズムの

視点を使い分けてきました。グローバル化の進展のなか、文化の盗用が問題になるなど、事態はさらに複雑になってきています。

■ ■ 多文化主義を考える ■ ■

私たちは、他者の文化を考えるときに、自分たちの文化だけが正しく優れているのだと考える自民族中心主義（エスノセントリズム）に陥ってしまいがちです。それぞれの文化は異なっていますが、そこに優劣をつけられないという、文化相対主義の考え方は重要です。しかし、フランスのイスラームを信仰する女子生徒のスカーフの問題や、アフガニスタンの侵攻の際にタリバーンの女性差別的な文化が問題にされた件など、具体的な運用を考える際には、難しい問題を引き起こすこともあります。

複数の文化を尊重する多文化主義の実践の場合にも、同様であり、私たちは互いの文化に敬意を払い、尊重しつつ、どのように対話するかという問題に取り組んでいかなければいけません。

